

食卓が

勉強机



吉村 幸代

長野県防災会議の委員を務めている。同会議は自衛隊、警察、消防、交通・報道・医療などの公共機関、学識経験者といった、あらゆる分野の代表者によって構成されており、会長は県知事。私は一県民として委嘱を受けた。併せて原子力災害対策部会のメンバーにも名を連ね、時折、長野県庁へ出向いている。

雪の季節が近い。先週は、2月の大雪災害を受けて長野県地域防災計画を修正すること、招集があった。長野県は、災害・防災情報専用のツイッターを始めたそうだ。都道府県レベルでは初めてとのこと、期待が持てる。

今年には自然災害の多い年であった。県内だけでも豪雪に始まり、豪雨と土石流災害、大噴火、地震。白く覆われた御嶽山頂の画像に行方不明者を想い、胸塞がれる。どこか、自然界のバランスが崩れ始めていると感じる。何か、地球の秘めたエネルギーが噴出してきているような印象も受ける。気象の専門家が、「常識が通用しない時代」と説明していた。本紙の記者氏が、紅葉の御嶽山を取材中に噴火に遭遇したことを振り返り、「あの時、三ノ池へ向かわず山頂を目指してい

れば」と書いていた。よく分かる。心に負った傷が、「もしも」を呼び起こす。

東日本大震災の当日、私は家族とともに岩手県にいた。「あの日、当初の予定とおりに三陸海岸へ出かけていたら」と思うと、今も胸がときどき始める。なおかつ被災体験を経て、私は不思議な感覚に包まれるようなもなった。自分は生きている。それ以上に、「生かされている」という気がしてならないのだ。

平成23年、被災地から脱出するかのようにして信州に帰った私は、寿台公民館長として連続講座「シリーズ我が町の防災を考える」を立ち上げた。公民館事業も地域活動も、究極的には全てが防災に行き着くという実感を抱いて、現在も折に触れて講演を引き受けている。生かされている自分が語ることで、役に立てるならと願いつつ。

これだけ自然災害が続いているということは、他人事と高を括ってはいけないうことだ。体験がないと理解はなかなか深まりにくい上に、喉元過ぎれば熱さを忘れがち。想像する力、忘れない努力が求められる。

今年もあと1カ月余りとなった。年末が近づくと、「去年と同じ今年の幸せ」という言葉を思い浮かべる。いつもどおりの日々が続く幸福を噛み締め、平穏を祈りながら、大掃除のついでに防災備品の点検をするように。

(よしむら・さちよ、前寿台公民館長、主婦 松本市)

去年と同じ今年の幸せ